

「初夏のキノコ(5)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

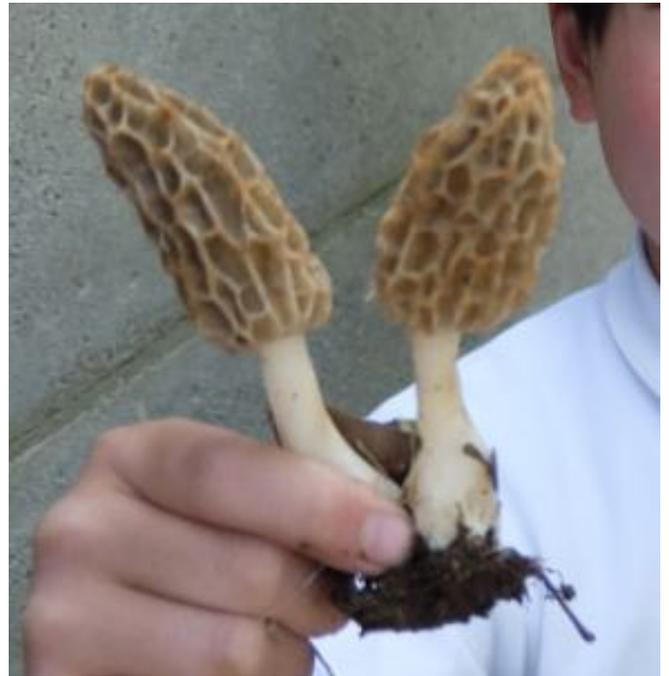
キノコの役割は、地中や朽木の中に蔓延している菌糸から、地上(空気中)に子実体を成長させ、胞子の形成と拡散をすることである。キノコは大きく分けて「子囊菌」と「担子菌」に大別できる。子囊菌には、傘やヒダがないのが普通で、変わった形状のものが多いた特徴だ。



写真は「ヒロチャワタケ」*Aleuria aurantia* という子囊菌である。英語では”Orange-peel Fungus”と呼ばれ、まさに「ミカンの皮」である。子実体の表面に「子囊」をたくさん形成し、その中に胞子を作る。



(実は踏んでもらったほうが、胞子は拡散される)



こちらは「アミガサタケ」*Morchella esculenta* 春～初夏にかけて、公園の植え込みや道端の塀の隙間などにも普通に見られる。子実体の表面に網の目のような凹凸が多数見られ、その中に子囊を形成し、胞子を拡散させている。日本では馴染みが薄いですが、フランス料理では「モリーユ」として欠かせない。

傘の裏に「ひだ」を持つキノコは、そこに「担子器」と呼ばれる器官を作り、その上で胞子を形成する。私はその「担子器」そのものと、そこに着いている胞子を顕微鏡で観察してみたいと思った。



カワリハツの傘の裏の「ヒダ」を、1枚採取してスライドの上に置いてみた。シイタケやマツタケとちがってヒダが強靱でなく、もろい。慎重に採取しないと、簡単に割れてしまう。何度かやってやっと成功した。